



大学共同利用機関法人

人間文化研究機構

人文学における多様な「研究力」を
はかるためには
-人文機構の取り組みをもとに

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立歴史民俗博物館
後藤真

人文・社会科学における特徴と指標整理に向けて 2

- 0. データ整備の重要性→基礎データの不足
- 1. 人文学の特徴をどのように考えるか？
- 2. 特徴を踏まえた指標の可能性はあるか？
- 3. 指標と評価をどのように考えるか？



自己紹介

- 後藤真
- 国立歴史民俗博物館 准教授
- 2015年秋まで 人間文化研究機構本部
- その後、歴博に
- 専門は人文情報学（特に歴史資料のデジタル化）
- この文脈で研究評価等に関わることに



基礎データの不足

- 人文社会系の研究は計量的には測れないのか？
 - 半分はあたっている しかし、半分しかあたっていない
- 研究成果は文章で書かれているということは、自然科学でも、工学でも、人文社会科学でも同様→一定の計量方法はある しかしデータがない！
- もちろん、他分野と同一線上では測れない
- これまでに、それらの論点を整理してきた
 - 著書・著者数・言語・論文の引用速度など



アウトプットの多様性

- ロジックモデルをもとに考えるならば
 - 著書や展示、動画などをどのように考えるか
 - アウトプットになりにくいインパクトをどのように考えるか（外部の有識者委員など）
- 共同利用機関として→基盤づくり
 - データベース構築・資料そのもの・図書の「所蔵」
 - 資料集作成・目録作成 etc.

様々な指標を俯瞰する多層的なフレームワーク化の試み (ロジックモデルを用いた機関レベルでの内部評価の例)

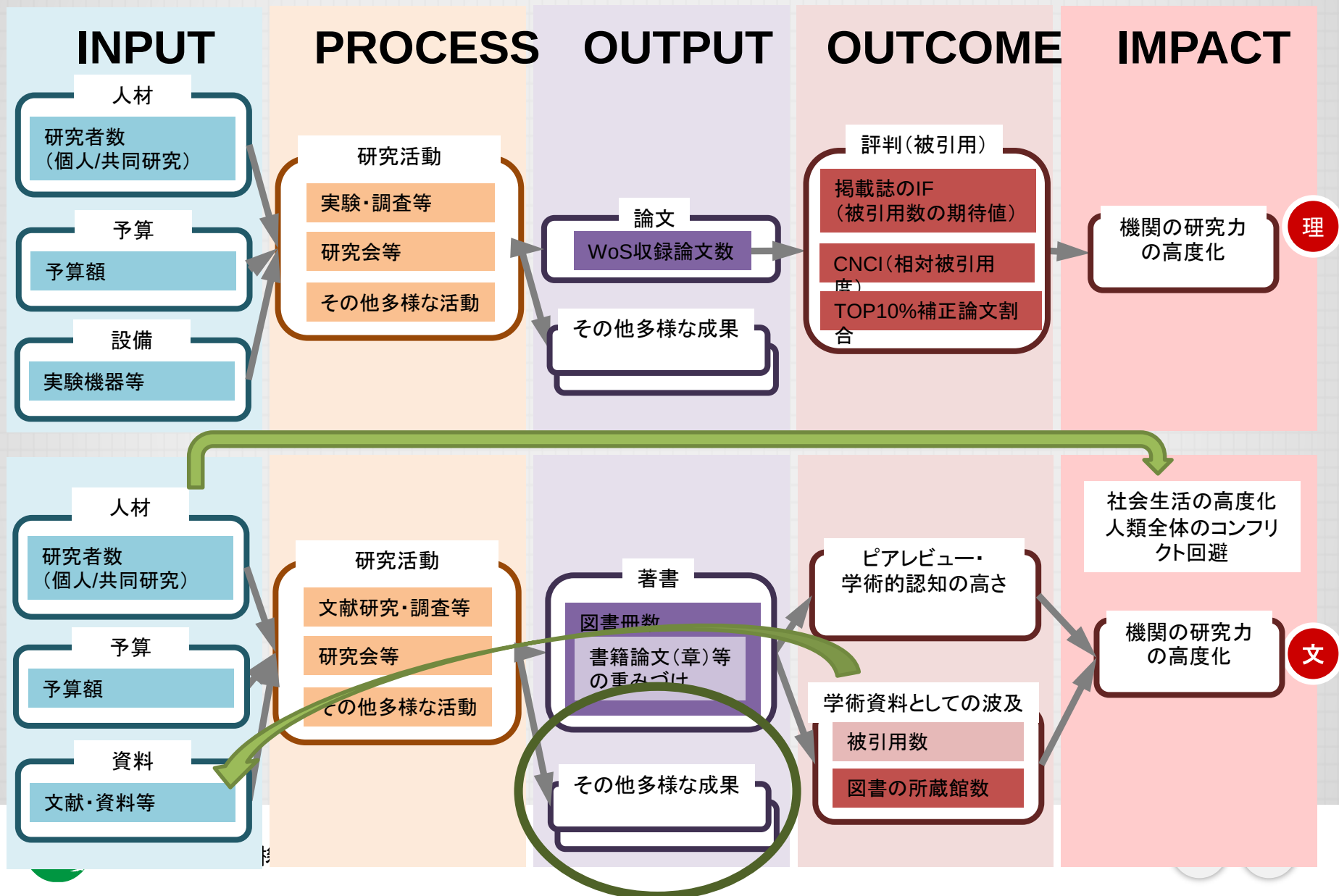
凡例：

評価内容

数値化しうる指標

入手コストが高い(DB
化されていない等)指標

2019/5/22
地球研・統数研共同研究
キックオフシンポジウム



人文系での指標の可能性

- 書籍の中の論文数を雑誌の論文数とあわせて見る

	書籍内論文数	雑誌論文数	科研費取得 件数順位
東京大学	239	326	1
早稲田大学	151	90	2
京都大学	119	168	3
筑波大学	82	93	15
大阪大学	56	67	4
広島大学	55	35	14
九州大学	54	74	5
慶應義塾大学	51	85	-
神戸大学	48	56	11
北海道大学	46	68	7

Scopusのデータを科研費分類に
再分類した後の史学

	書籍	雑誌	科研費件数順位
東京大学	508	26,651	1
京都大学	465	19,413	3
大阪大学	374	17,088	2
東北大学	306	14,813	5
名古屋大学	233	10,146	4
北海道大学	220	10,444	7
九州大学	207	10,644	6
筑波大学	151	6,957	10
慶應義塾大学	148	6,731	15
千葉大学	137	5,073	20

参考：同条件の生物科学



人文機構の取り組みとして

- さまざまな研究の可視化を考える
 - 「サイエンスマップ」
 - 質的にどのように評価するのか
- 人文系評価システム検討委員会及び作業部会
 - 作業部会を特に6月までに集中的に実施
 - 人文系の研究に関して、指標の意義も含めて、評価のあり方を検討中



論文の記述内容に着目した、解析とマッピングによる人文研究の成果表示システムの構築 (人文系サイエンスマップ) Science Map In the Humanities

ねらい

- ・ 人文系の研究成果を可視化すること
- ・ 特に量ではなく、その質と多様性に注目
- ・ これまでと異なる「研究世界」の創出

手法

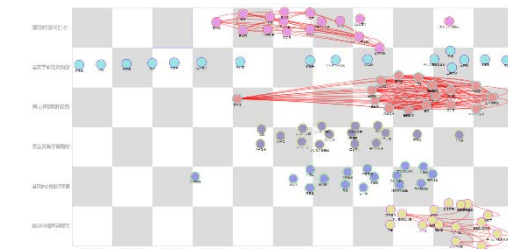
- ・ 人文機構のリポジトリにある論文（約15000本）をクロールしスキャン
- ・ テキストデータをもとに類似の用語をクラスタリング
- ・ クラスタリングしたものを平面上におとしこむ

※ある検索キーワードを入れ、そのマップを表示

検索キーワード

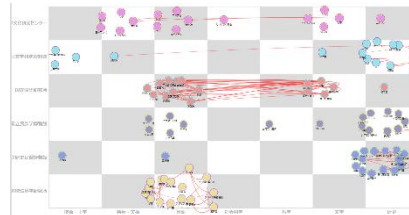
検索

例1：鹿児島・方言で検索



機関別クラスタリング表示（横軸：年代 縦軸：機関）

- ・ 国語研（上から3つ目）は2000年代後半から関連性の強い研究を集中的に出している
- ・ 民博（上から4つ目）は中心的ではない地域の言語研究がコンスタントに行われる
- ・ 日文研は2000年前後に多く研究があるが、近年はあまり対象としていない



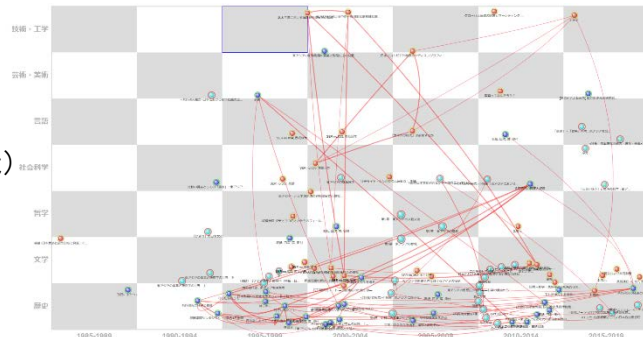
分野別表示（縦軸：研究分野 縦軸：機関）

- ・ 国語研（赤）は言語学に集中した研究である一方で日文研（ピンク）の分野は広い。
- ・ 民博・歴博（青）は言語と歴史の両分野にまたがる

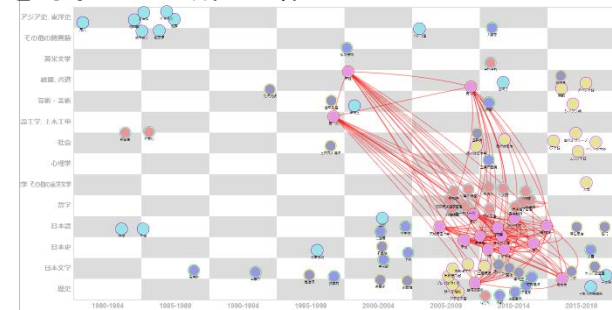
例2：東アジアで検索

論文1件ごと分割表示
(3機関のみ・縦軸：分野
横軸：年代)

- ・ 歴博は歴史中心（濃い青）
- ・ 日文研も歴史が多い（青緑）
- ・ 民博は分野横断型（赤）



詳細分野別表示（6機関） 機構全体では2000年代後半から、より広い分野を対象とした研究が増えている



特徴

- ・ 研究の傾向が年代別・機関別・分野別などから分析
- ・ 単純な論文の量や引用等ではない、研究の広がりをつながりをあきらかに
- ・ リポジトリへのリンクもあるので、リポジトリのマップ上検索システムとしても利用可能
- ・ クローリングは他大学等のものも可能であり、今後は他大学等との関係性分析などを実施予定

人文学的指標の考え方

- 基本的考え方

- （内容としても成果の出方としても）多様な研究の活動量
 - 論文、著書（専門書・一般書・資料集 etc.）、展示、映像
- 社会的なインパクトへの評価
 - 専門的な知見をもととした人間の生活そのものへの還元
 - 国や自治体等の委員、新聞やWeb媒体等への成果執筆、新聞書評等を通じた専門書の還元など

- 近年の要請（学術分科会による「人文学・社会科学が先導する未来社会の共創に向けて（審議のまとめ）」）

- 国際的な研究指標 国際共同研究やそれにもとづく成果
- 学際的な研究指標 iMD（筑波大学）や地球研の議論



研究活動量および社会的インパクト（個人的例示）

11

- 多様な研究成果や社会的活動に対して、一定の係数を
 - 例：研究であれば論文1に対して著書＊　展示は研究活動を＊＊とし、社会的成果を＊として見積もるなど（あくまでも例示であり、確定していません）
 - そのうえで両者の活動を効果的に評価する
 - 対象となるデータ候補
 - 論文・単著・分担執筆・口頭発表・映像および音声・データベース構築件数・招待講演・資料集・事典等・翻訳単著・翻訳共著・展示回数・一般書・一般向けシンポ・新聞等・成果メディア掲載・学会役員・国・自治体等委員・受賞・国際共同研究論文・国際共同研究単著・国際共同研究共著・国際共同研究発表
 - 研究者のデータベース等からとる
 - 期間はおおむね10年間か（人社系の研究スパンの「長さ」）



課題

- データをそろえるコスト
- この考え方の中で「質」を見るか？→基本的には別の議論とすべき
- 係数を分野単位でどこまで細かくするか
- 社会的インパクトの係数基準



原則として

- 指標は道具である→ロジックモデルのような形であれ「組織の何を見るか」に即して参照するものであり、万能な指標は存在しない
- 評価をどのように理解するのか（目的と手段の関係性・「内向き」「外向き」）
- 論文数や成果で測るのはなぜか？→研究が進むと論文を書く（であろう）←論文が多いほうがより研究が進んでいる
- 学問の評価の基本は「研究が進んでいるか」否か

原則として

- 人文学の研究の可視化は重要
 - 個別研究は（おそらく他分野に比しても）よく見えている
 - では、全体をどう見せるのか？→多様性を確保するためには業界全体の「厚み」が必要（歴史学の多様性を確保するためには、そもそも歴史学の研究者が一定数いなければならない）→この厚みを可視化し、社会の理解を得ることが学問全体の活性化にもつながる

